

平成31年度（令和元年度） 全国学力・学習状況調査の結果について



平成31年4月18日(木)に実施した「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査」について、牛久市の児童生徒の傾向をお知らせします。



全国学力・学習状況調査とは？

全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析するために実施されています。

それにより、教育施策の成果と課題を検証して改善を図ったり、学校における教育指導の充実や児童生徒の学習状況の改善に役立てたりします。

今年度の調査の特徴としては、これまでA問題（主に「知識」に関する問題）、B問題（主に「活用」に関する問題）と分かれていたものが、知識と活用を一体的に問う調査問題となりました。また、初めて中学校英語の調査が実施されました。

○調査の対象

小学校第6学年 及び 中学校第3学年

○調査内容

- ①教科に関する調査 小学校：国語，算数
中学校：国語，数学，英語



※中学校英語の調査は今回初めて実施。

②質問紙調査 学習に関する関心・意欲・態度や生活習慣，学習習慣などに関する内容。
なお、この調査は学力の一部をはかるもので、学力のすべてをはかるものではありません。



結果の概要

3教科すべてにおいて、
全国、茨城県の平均正答率を **上回りました。**

◇小学校国語・中学校国語

4つの領域「話す・聞く」「書く」「読む」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（言語）」からの出題があり、中学校はいずれも平均正答率は全国や県と比べ、高くなっています。小学校においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（言語）」のみ、わずかに全国・県の平均正答率を下回ってしまいました。

◇小学校算数・中学校数学

4つの領域「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」（中学校では「数と式」「図形」「関数」「資料の活用）」からの出題があり、いずれも平均正答率は全国や県と比べ、高くなっています。

◇中学校英語

4つの評価の観点「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」からの出題がありました。「話すこと」に関しては参考値）いずれも平均正答率は全国や県と比べ、高くなっています。



領域	成果が見られた内容（◇）と課題が見られた内容（◆）
話す・聞く	◇話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って自分の理解を確認するための質問をすることについては、平均正答率が8割を超えており、満足できる状況です。 ◆話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめることについては、平均正答率は8割近いものの、無解答率が高いことが課題です。
書く	◇情報を相手にわかりやすく伝えるための記述の仕方の工夫を捉えることについては、7割以上の児童が理解しています。 ◆目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書くことについては、国や県の平均正答率を超えてはいるものの、さらに努力を要する状況です。
読む	◇目的に応じて本や文章全体を概観して効果的に読むことに関しては、9割以上の児童が目次を活用して適切なものを選択できており、十分満足できる状況です。 ◇目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読むことについても、8割以上の児童が正しく理解しており、満足できる状況です。
言語	◇ことわざの意味を理解して、自分の表現に用いることについては、平均正答率が8割近くに達しており、おおむね満足できる状況です。 ◆漢字を文の中で正しく使うことについては、同音異義語を文脈に沿って正しく使うことに課題が見られます。これについては、平成29年度調査で同じ漢字が出題されていますが、依然として改善が見られず、引き続き努力を要する状況です。



授業改善の方向



文脈に沿って、正しい漢字を書く力を身に付けます～「言語」領域

今回の調査で最も平均正答率の低かった設問は、同音異義語を正しく書く問題でした。漢字を正しく書くには、新出漢字を繰り返し練習することにとどまらず、日常的に文章の中で文脈に沿って正しい使い方を習得することが大切です。そこで、授業では、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、確かめたりする学習を取り入れていきます。

具体的には、自分や友達が書いた文章を見直す場面（推敲）や、インタビューなどで聞いてメモした内容を文章にまとめる場面を多く設定し、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、漢字辞典で確かめたりするなどです。これは、国語科だけではなく他教科でレポートを書いたり調べ学習をしたりする際にも大切な力であるため、教科横断的に学校全体で組織的に取り組んでいきます。

目的や意図に応じて、複数の資料から必要な事柄を選んで、整理して書く力を身に付けます～「書く」領域

複数の資料から適切な内容を取り上げてそれらを関連付けて理解したり表現したりすることについては、これまでも課題とされてきました。今回の調査でも、複数の条件のいずれかを満たしていない記述が多く見られ、依然として課題があることが分かりました。この課題の克服のために、日頃の授業において、事実と感想、意見などを区別して書くことを意識した学習活動、自分の考えを支える根拠や理由、それを裏付ける事例などを明確にして話したり書いたりする学習活動などに取り組んでいきます。

具体的には、文中から得た情報（事実）と筆者の考えを分けて捉えたり、文章の構成を知る手掛かりとなる「なぜなら」「つまり」「このように」といった言葉に着目したりするなどの学習を通して、文章全体の構成に即して内容を書き分けることができるよう指導していきます。また、目的に照らして必要な本や資料を自ら選ぶことができるよう、これまで同様、学校図書館を利用し、学校司書の支援を受けながら、意図的・計画的に読書活動を取り入れていくよう努めます。



領域	成果が見られた内容（◇）と課題が見られた内容（◆）
話す・聞く	◇話合いの話題や方向を捉えることについて、85%以上の生徒が正しく理解できており、国や県の平均正答率を大きく上回り、十分満足できる状況です。 ◆話合いの話題や方向を捉えて自分の考えをもつことについては、国や県の平均正答率を超えてはいますが、さらに努力を要する状況です。また、無解答も多いです。
書く	◇書いた文章を読み返し、論の展開にふさわしい語句や文の使い方を考えることについては、9割を超える生徒が正しく理解しており、満足できる状況です。 ◆伝えたい事柄について、根拠を明確にして書くことについては毎年課題として残っていましたが、今回平均正答率が9割近くとなり改善が図られました。しかし、無解答率がやや高く、今後も努力が必要です。
読む	◇文章の展開に即して、情報を整理し、内容を捉えることについて、情報を過不足なく選択し、整理することができており、おおむね満足できる状況です。 ◆文章に表れているものの見方や考え方について、自分の考えをもつことについて、9割を超える生徒が記述できており満足できる状況です。記述内容についてはより豊かに表現力を伸ばしていきたいと考えます。
言語	◇語の一部を省いた表現について、8割を超える生徒が、話や文章の中での適切な活用の仕方を理解しており、満足できる状況です。 ◆封筒の書き方について、国や県の平均正答率は超えているものの、正答率としてはたいへん低く、また無解答も多いため、手紙やはがきの書き方を学ぶ機会を設け、正しい理解のために学習の工夫が必要です。



授業改善の方向

話合いの話題や流れを踏まえ、自分の考えをもつ力を身に付けます

～「話す・聞く」領域・「書く」領域

牛久市内小中学校では、ペアやグループによる学びを多く取り入れた「主体的・対話的で深い学び」を継続的に展開してきました。そのため、多くの生徒が相手意識・目的意識をもって聞いたり話したりすることができており、一定の成果を得ています。しかし、今回の調査では、話合いの途中で、それぞれの発言の仕方について留意すべき点を確認したり、目指すゴールに向けて論点を整理するための絞り込み方を考えたりするなど、よりよい話合いの仕方について見直していくことに課題が見られました。そこで、授業では、小学校での学習を踏まえ、司会の進め方や話合いの記録の仕方などを確認した上で、実際に記録を取りながら話合を行うなどの学習活動を工夫していきます。自分の考えをもつためには、相手の話を聞いて共感したり疑問を持ったりすることがまず大切なことです。そこで、これまで以上にメモの取り方を工夫し、話合いの方向性を捉えて話合いができるよう意識した指導に努めます。この力は、国語科のみならず、他教科や学級活動等で行われる話合いにおいても磨いていける力です。教科を超え、学校全体で取り組んでいきます。

封筒やはがきの書き方を理解し、文字の大きさや配列などに注意して書く力を身に付けます

～「言語」領域

電子メールや SNS でのやり取りが中学生の間でも一般的なものとなり、封書やはがきを実際に書く機会自体が減ってきています。しかし、手紙の基本的な形式に基づき、文字の大きさや配列に気を付けて、丁寧に読みやすく書くことは、社会生活に役立つ書写の能力であるばかりでなく、相手への敬意を考えることにもつながり、大切にしていきたい学びです。そこで、授業では、書写や総合的な学習の時間などとの関連を図り、実際にはがきや便せんなどに手紙を書く学習を意図的に設定します。職場体験や地域と連携した活動に際し、依頼状やお礼状を書くなどの機会も生かしていきます。

媒体が多様化する昨今、場面にふさわしい発信や媒体の選択についても考えさせていきます。



小学校 算数

領域	成果が見られた内容（◇）と課題が見られた内容（◆）
数と計算	<p>◇示された減法に関して成り立つ性質を基にした計算の仕方を解釈し、適用することについては、平均正答率が8割を超えており、満足できる状況です。</p> <p>◇示された計算の仕方を解釈し、かける数や割る数を選び、計算しやすい式にして計算することについては、平均正答率が約8割で、おおむね満足できる状況です。</p> <p>◆示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述することについては、国や県の平均正答率は超えているものの、さらに努力を要する状況です。</p>
量と測定	<p>◇場面の状況から、単位量当たりの大きさを基に、求め方と答えを記述し、その結果から判断することについては、約7割の児童が理解しています。</p> <p>◆示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述することについては、県の平均正答率は超えているものの、国の平均正答率は下回っており、無解答率が高い点も課題です。</p>
図形	<p>◇台形について理解することについては、平均正答率が9割を超えており、十分満足できる状況です。</p> <p>◆図形の性質や構成要素に着目し、ほかの図形を構成することについては、国や県の平均正答率は超えてはいるものの、さらに努力を要する状況です。</p>
数量関係	<p>◇棒グラフから、資料の特徴や傾向を読み取ることについては、平均正答率が9割を超え、十分満足できる状況です。</p> <p>◆資料の特徴や傾向を関連付けて、一人当たりの水の使用量の増減を判断し、その理由を記述することについては、国や県の平均正答率を超えています。しかし、その特徴を関連付けてそこから新たな特徴を見出すことについては課題です。</p>



授業改善の方向

資料の特徴や傾向を基に考察したり、複数の資料の特徴や傾向を関連付けて判断したりする力を身に付けます ～「数量関係」領域

「数量関係」領域で課題に挙げた、「複数の資料の特徴や傾向を関連付け、一つの資料からは判断することができない事柄について判断すること」は、これまでも課題とされてきました。今回の調査でも、それぞれのグラフの特徴は読み取れているものの、その特徴を関連付けてそこから新たな特徴を見出すことに課題があることが分かりました。この課題克服のためには、日常生活において、目的に応じて必要な資料を収集し、資料の特徴や傾向に着目して事象を考察し、判断することが重要です。そこで、授業では情報とグラフを関連付け、複数の観点でグラフから情報を読み取ることができるような学習課題を設定します。課題解決の中で、グラフから数値を読み取るだけでなく、数値をグラフと関連付けてどのような観点で読み取ったのかを説明したり、グラフを読み取る観点の違いにより結論がどう異なるかを考えたりしていき、目的に応じて数量や変わり方、全体に対する割合など、複数の観点に着目して考察し、結論を導き出せる授業の工夫を図ります。

示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述する力を身に付けます ～「数と計算」領域

「数と計算」領域で課題に挙げた「示された計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述する」ためには、適用する数の範囲を徐々に広げていながら、統合的に考え、計算に関して成り立つ性質を見出し、発展することができるようにしていくことが大切です。そこで、授業では、例えば商が同じになるいくつかの除法の式を並べ、それらの関連から除法に関して成り立つ性質を、児童自身が発見できるような学習活動を展開していきます。また、計算をする際には、その計算が確実にできるとともに、計算を効率的にするために工夫することができるようにすることも大切です。さらに、児童自身が見出した性質を、「わられる数」や「わる数」、「商」といった算数の用語を適切に用いて説明する学習場面を工夫していきます。



領域	成果が見られた内容（◇）と課題が見られた内容（◆）
数と式	<p>◇簡単な連立二元一次方程式を解くことについては、平均正答率が8割近くに達しており、おおむね満足できる状況です。</p> <p>◇総合的・発展的に考察し、得られた数学的な結果を事象に即して解釈することについては平均正答率が8割近くに達しており、おおむね満足できる状況です。</p> <p>◆事柄が成り立つ理由を説明することについては、全国的に平均正答率が低い内容です。国や県の平均正答率を超えてはいるものの、無解答率も高く、さらに努力を要する状況です。</p>
図形	<p>◇平行移動の意味を理解することについては、平均正答率が8割を超えており、満足できる状況です。</p> <p>◇反例の意味を理解することについては、平均正答率が8割を超えており、満足できる状況です。</p> <p>◆結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することについては国や県の平均正答率を超えてはいるものの、さらに努力を要する状況です。</p>
関数	<p>◆事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することについては、国や県の平均正答率を大きく上回ってはいますが、全国的に平均正答率が低い内容であるため、さらに努力をしていく必要があります。</p> <p>◆グラフ上の2つの座標の差を、事象に即して解釈することについては、国や県の平均正答率を超えてはいるものの、さらに努力を要する状況です。</p>
資料の活用	<p>◇簡単な場合について、確率を求めることについては、7割以上の生徒が理解しています。</p> <p>◆資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することについては、国や県の平均正答率を超えています。しかし、無解答率が高い点が課題です。</p>



授業改善の方向

事象を数学的に解釈し、数学的な表現を用いて説明する力を身に付けます ～「関数」領域

「関数」領域で課題に挙げた、「事象を数学的に解釈し、数学的な表現を用いて説明する力を身に付ける」ためには、具体的な場面において、事象を理想化したり、単純化したりして、数学の問題として捉え、日常生活における問題が、数学を活用して解決できることを理解して取り組むことが大切です。そのために、日頃の授業において、問題解決の過程や方法を振り返り、それを説明する活動を工夫していきます。こうした活動を通して、グラフや式の効果について気付き、グラフを用いるとおおよそのことが一目で分かることや、式を用いると正確な値が求められることなど、数学を活用することのよさを生徒一人一人が会得できるように取り組んでいきます。

分布の傾向を読み取り、批判的に考察し判断する力を身に付けます ～「資料の活用」領域

「資料の活用」領域で課題に挙げた「資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する」ためには、代表値を求めたりデータの分布の様子を読み取ったりする場面を設定し、その傾向を捉えて、批判的に考察し判断できるようにしていくことが大切です。そこで、授業では、データの分布を捉えて、説明すべき事柄とその根拠を明確にしながら説明し合う場面を多く設定します。自分が判断した事柄とその根拠を、データの分布の特徴を捉えて説明したり、代表値を用いて説明したりする活動を行うことで、統計的な解釈や判断を多面的に吟味し、よりよい解決や結論を見出すことができる力を身に付けていくよう努めていきます。



領域	成果が見られた内容（◇）と課題が見られた内容（◆）
聞くこと	<p>◇語と語の連結による音変化をとらえて情報を正確に聞き取ること、教室英語を理解して情報を正確に聞き取ることについては、9割以上の生徒が理解しており、十分満足できる状況です。</p> <p>◇まとまりのある英語を聞いて、必要な情報を理解することについては、8割以上の生徒が理解しており、満足できる状況です。</p> <p>◆聞いて把握した内容について、適切に応じることについては無解答率が高く、課題です。</p>
読むこと	<p>◇日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものの内容を、正確に読み取ることについては8割以上の生徒が理解しています。</p> <p>◆書かれた内容に対して、自分の考えを示すことができるよう、話の内容や書き手の意見などをとらえることについては、無解答が多いことに加え、書かれている内容の理解が不十分であることに課題が見られます。</p>
書くこと	<p>◇文の中で適切に接続詞を用いることについては8割以上の生徒が理解しており、満足できる状況です。</p> <p>◇一般動詞の2人称単数現在時制の疑問文を正確に書くことについては約8割の生徒が理解しており、おおむね満足できる状況です。</p> <p>◆与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことについては、国や県の平均正答率を超えてはいるものの、さらに努力を要する状況です。</p>



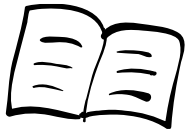
授業改善の方向

聞いて把握した内容について、適切に応じることができる力を身に付けます
～「聞くこと」領域

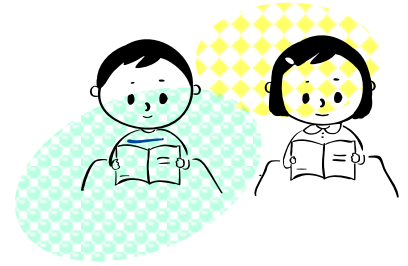
これまで、市内小中学校では、ALT（英語指導助手）が授業に入ることで、英語によるコミュニケーションの力を着実に身に付けてきました。そのため、本調査でも正確に聞き取ることについては成果が上がっています。今回課題であった「聞いて把握した内容について、適切に応じる」力を付けるには、自然な口調で話されたり読まれたりするまとまりのある複数の英文を聞き、その全体の概要や内容の要点を捉えることができるようになることが大切であり、場面設定や話し手の意図などを踏まえた理解が求められます。今後は、授業中の英語でのやり取りの際、「聞くこと」が能動的な目的を持つ活動になるよう工夫し、授業者やALTとの会話、ペア・グループの活動の中で、自分の考えをもって受け答えをする活動の機会を大切にしていきます。また、単語を過度に強調したり、ゆっくり言ったり、同じ語句や文を繰り返したりせず、自然な英語の使用場面に近づけた活動を展開していきます。

与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書く力を身に付けます
～「書く」領域






与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くには、自分の考えを整理する力、読み手に正しく伝えるための語や文法事項への正しい理解、さらに文章の構成力も必要となります。特に今回の調査では、「25語以上の文章」という条件に満たない量の解答が多く見られました。こうした書く力を付けるためには、「書くこと」を「読むこと」や「話すこと」など複数の領域と統合させることで、書く内容を増やしたりまとめたりする学習活動が大切です。そこで、教科横断的に生徒の生活に合った必要感のあるテーマを決め、テーマに関連したディスカッションや調べ学習などを並行して行う中で、自分の考えや気持ちを整理して書く活動につなげていく授業の工夫を図ります。また、「書くこと」へのつまづきを的確に把握し、何をどのように書けばよいか、表現の面での手立てを講じていき、ペアやグループで伝え合う中で書く内容をより明確にしていけるようにします。



質問紙調査の結果から



学校での学習や自分のことに関して

-  ○「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」と感じている児童生徒の割合が高いです。
-  ○「自分で課題を立てて情報を整理して、調べたことを発表するなどの学習によく取り組んでいる」と感じている児童生徒の割合が高いです。
-  ○「道徳の授業で、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動によく取り組んでいる」と感じている児童生徒が多いです。
-  ○「自分にはよいところがある」と思う児童生徒の割合が高まってきています。
-  ▲「授業で学んだことをほかの学習に生かしている」と思う児童生徒の割合が全国・県と比較すると低いです。

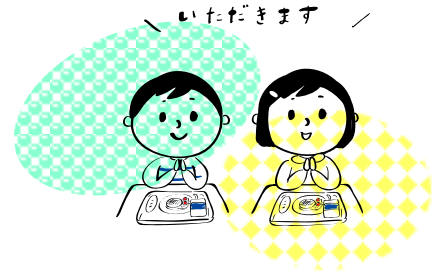
牛久市では、来年度から完全実施となる学習指導要領が打ち出している「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」にいち早く取り組んできました。「一人残らず質の高い学びを保障する」授業づくりをめざし、市内の小中学校全校で協働的な学習を展開しています。







今回の結果はそうした学習の成果が表れている結果と言えます。

仲間と関わることで自分の学びが深まっているという実感、仲間の学びに自分が役立っているという実感で、自己肯定感・自己有用感も高まりつつあります。

今後は「今、学んでいることが生活や将来とどうつながっているか、どんな時に役立つ力なのか」等をさらに意識し、教科横断的なカリキュラム・マネジメントの視点に立った授業づくりを進めていきます。

基本的な生活習慣・家庭学習に関して



-  ○「朝食を毎日食べている」という小学生（児童）の割合は、全国に比べて高いです。
-  ○「毎日同じくらいの時間に起きている」という小学生（児童）の割合は、全国に比べて高いです。
-  ○「毎日同じくらいの時間に寝ている」という中学生（生徒）の割合は、全国に比べて高いです。
-  ○「自分で計画を立てて家庭学習をしている」という児童生徒の割合は、全国と比べて高いです。
-  ▲「毎日同じくらいの時間に起きている」という中学生（生徒）の割合は、全国に比べて低いです。
-  ▲「毎日同じくらいの時間に寝ている」という小学生（児童）の割合は、全国と比べて低いです。

国の調査では、朝食を毎日食べている子ほど、学力調査の平均正答率が高いという結果が出ています。このことから、児童生徒の基本的な生活習慣と学力には相関関係が見られることが分かります。基本的な生活習慣の定着については、ご家庭でのご理解・ご協力が不可欠です。今後も引き続き、ご家庭でのお声かけをお願いいたします。

家庭学習については、放課後の児童生徒の過ごし方も多様化し、一律の課題では難しい現状もあるようです。学校では、授業で学んだことが家庭学習へとつながっていくよう、家庭学習の課題や方法についても工夫したり検討したりしています。

また、牛久市では小中一貫教育推進事業として、中学校区で「家庭学習の手引き」を共有したり、各校で参考にしながら見直したりしています。小学校から中学校へ、学習習慣がより良い形でつながっていくよう努めていきます。